

達成度調査等及び児童の学習状況から見た成果と課題		○成果	▲課題
第1学年		第2学年	
第1学年		第2学年	
第3学年		第3学年	
国語	▲言語知識・活用の校内平均が全国平均よりも1点しか上回っていないことから、慣用句やことわざなどの言い回しの理解が不十分であることが分かる。また、小説読解についても他の中高一貫校がほぼ8割を超えている中、それを下回っている。小学校の段階で作文を書いて楽しく感じなかったという生徒が4割弱いる。学力推移調査第一回のS層が1割程度しかいないことも課題である。	▲多くの分野で若干平均を上回っているが、予断を許さない状況である。また、A層が少なくC・D層が例年に比べ多いようである。基礎基本の学習を進めるだけでなく、それらをどのように連携させ発展的学習につなげるかが求められている。 ○学習を始めたばかりの古典の得点率が比較的高かったため、興味関心とともに向学心を養えるような授業展開がおこなえている。	○説明的文章と小説の読解は、全国平均比で見ても、点数が取れている。また、A層の人数は昨年に比べても概ね横ばいで、A層の生徒の実力は安定してきている。 ▲時間をかけて身に付ける知識が必要な言語知識活用・古文読解の分野で得点が伸びない。また、説明的文章読解においてはD層とC・D層の、古文分野においてはA層とB～D層の得点率の差が大きい(学力推移調査第1回)。
社会	○基礎学力の定着度、意欲・関心が高い生徒が多い。グループワークやまとめ作業などは段取り良く進めることができています。 ▲小学生の時に社会が嫌い・苦手という生徒が8割以上であった。基礎学力に差がみられ、定期考査等の学力考査に表れている。知識を活用して「思考し・判断し・表現する」といった実践力が乏しい。言語活動の充実を通して「知識の活用」を見据えた指導を行う。	○基礎学力の定着度は高く、班活動や自主的な調べ学習に意欲的な生徒も多い。 ▲学習状況や学習意欲に差がみられ、A層とC・D層の差が大きい。A層には自主的に探究する課題を提示し、C・D層には学習状況を確認して復習の機会を設けるなど、個に応じた対応に取り組む。	○社会事象に関する基礎的知識及び歴史・地理的分野の学力が定着している生徒は多い。また、学んだ知識を再構築して表現できる生徒も多く見られる。 ▲学習意欲に差がみられる。また、得た知識を用いた文章表現ができる生徒と苦手な生徒に分かれており、下位層は誤字・脱字が多い。上位層には自主的に探究する課題を提示し、C・D層には復習・文章表現の機会の設定等、個に応じた対応に取り組む。
数学	○計算問題について、A～C層の生徒は平均得点率9割以上、D層でも平均得点率8割8分となっており、基礎学力の定着度は良好である。 ▲応用問題に関しては、定着度に大きな差が見られる。学んだ内容を生活の中で活用する力を育成することが課題である。平日の学習時間が前年度と比較して低いので、改善していく必要がある。	○A～C層の生徒は、計算や基礎問題がある程度できており、基礎的な学力の定着ができています。 ▲D層の生徒は、A～C層に比べ3分の2程度しかできていない。習熟度別少人数のクラス編成等も工夫して基礎学力の定着が必要とされる。また、A～C層においても身につけていない既習事項について、改めて丁寧な指導をする必要がある。	○計算問題について、A～C層の生徒の平均得点率は概ね8割以上となっている。教科意識で苦手と回答した生徒が10%近く低下した。 ▲D層と他の層の差が大きいので学習のフォローが必要である。関数、方程式の単元の習熟度が低い傾向が見られる。平日・休日ともに学習時間が減少傾向にあり、改善に向けての取り組みが必要である。
理科	○定期考査などの結果より中学校の理科の学習内容がしっかりと定着しており、理科に興味をもって取り組む姿勢がみられる。 ▲応用問題など思考力を必要とする問題に対する学力をさらに強化することが必要である。	○中学校の理科の学習に慣れ、学習内容も定着してきている。理科に興味をもち、積極的に実験・観察に取り組んでいる。 ▲A層とD層が固定化しており、D層の学力向上に課題がある。	○基礎知識が定着している生徒が多く、理科に興味をもち、実験などに積極的に取り組んでいる。 ▲学習した内容を深く理解し、活用する力に課題がある。科学的事象に対して、覚えるだけでなく、実験・観察を通して得られた結果から考察し、規則性や法則性などを見出す力の育成が必要である。
英語	▲学力推移調査の学習実態調査によると「小学校で理解できず不安」という回答が38.2%であった。 ○授業評価の「学習効果」が期待値を上回り、「難易度」「授業内活動の充足感」「意識平均」も平均値を上回った。上記学習実態調査の「不安」を払拭しつつあるのではないかと考える。	○学力推移調査において、合計得点は全国平均を5点ほど上回る成績だった。項目別に見た場合、「対話文」や「リスニング」の得点率が高かった。 ▲項目別に見ると、「文法」が全国平均を下回る結果となった。また、層別ではB層、D層は「長文読解」、C層は「文構成」が課題であるとの分析があった。	○全国学力・学習状況調査の平均正答率は、77%で、東京都(公立)の59%を上回った。また、「話すこと」の平均正答率でも44%と、全国(国公私立)31%を上回った。 ▲学力推移調査の分野別得点率では、「長文読解」が45.5%と最も低く、B層の課題と指摘されている。
授業改善の方針			
国語	基本を疎かにしないように、意味調べ等をさせるだけでなく活用させるところまで行う。小説読解は感覚で読んでいところがあるので、根拠をもって読ませる。記述への忌避感があるため、社会生活に結び付けた課題をなるべく提示し、意欲をもって取り組めるように工夫するとともに、60字～200字程度の記述を定期的に行わせる。家庭学習の定着のため、自宅学習課題を与えることも重要である。		
社会	大半の生徒が基礎学力の定着度と学習に対する意欲・関心が高いことを生かし、グループワークやまとめ作業などの充実をはかり、自主的に探究する課題を提示する。基礎学力の定着度が低い生徒のために、その高い意欲が生かされる機会を設定していく。基礎学力の定着度と学習に対する意欲・関心が低いC・D層には学習状況の確認や、復習や文章表現の機会を設定し、個に応じた対応に取り組み、状況の改善を図る。		
数学	方程式や関数に対する苦手意識を払拭するため、演習を繰り返すことで基礎学力を定着させる。応用問題の回答力を高めるため、既習事項の活用をテーマにした授業を展開する。関心・意欲が低い生徒に関しては、それぞれの課題を明確にし、個に応じた指導を行うことで、改善を図る。		
理科	実験・観察を重視する方針は継続する。実験の目的をしっかりと把握させ、実験後に丁寧な考察を行うように改善する。第一分野では計算問題などの演習の時間を十分にとり、問題を解く力を養う。第二分野では、観察や視覚教材を活用する機会を増やし、自然に対する興味関心をより高めるように努める。		
英語	出来た事を褒めつつ苦手意識をなくし、学ぶ意欲につなげていく。長文読解力を伸ばすために長文を多く扱う。長文読解に必要な文法事項の定着のため、文法の学習を繰り返し行い、既習文法のまとめテストを実施する。語彙力増強のため、引き続き単語テストを定期的に行い、合格点に満たない生徒への追試を行う。		
音楽	各題材で学習したことを、他の学習により効果的に結び付けていけるような導き方を工夫する。ペアワークやグループワークなどを通して、生徒がより主体的に考え、試行錯誤できるような場面づくりをする。授業に集中できない生徒が一部いるため、T.T.における役割分担をもう一度見直し、学年と協力して指導をする。		
美術	自分の言葉で表現する力の育成を心掛け、他の生徒の作品に対して関心を抱くようになり、表現できる言葉が増えた。色や形の構成にこだわりを持つ生徒が多く、自分らしい作品にするために説得力や完成度を高めようとしていた。興味・関心が低い生徒には個に応じたスモールステップを踏ませ、自信を身に付けさせる。		
保健体育	1年生から、同じ形態の学習カードを活用した授業が継続して行われているので、生徒にとって理解しやすく、どの学年も同じように授業を展開することができている。後期課程でもグループ学習を取り入れているので、学習の積み重ねと継続について整理していくことが課題である。		
技術	ICTを活用することはできたが、生徒の興味・関心をひくような工夫が必要であると感じた。今後は実生活に関わる事項や実物教材を取り入れていく。		